



屋根のうえの猿



柴田斗真

四国山中。ひとすじの叫声をのこして猿が谷底へ飛びこむ。

或る作家は、夜汽車から見たそんな光景に詩想を得て、掌編をつむぎだすべく苦吟したという

。

のっぺりとした日常に、奇妙にひっかかり、刻印され、いつまでもわだかまる風景。それを想うとき、僕は絶え間なく続く時間のすきまにそっと滑りこむ。

さて、猿の話しである。

中華料理屋で、ラーメンと炒飯の慌ただしいランチをかきこんでいたら、テレビに猿のニュースが流れた。とある地方では、今年、猿がやたらと人家の近くまでおりてきて、通学途中の小学生の帽子をかっぱらったり、ランドセルに飛びついたりして問題になっているのだとか。インタビューをうけた保護者の面々は、眉根に皺をよせて、早急な対策をもとめていた。「なにかあってからでは遅いんです」僕は残りの炒飯を口にいれラーメンのスープで流しこむ。楊枝を二本と、汁の数滴はねた伝票ホルダーを手にしてレジにむかった。アルバイトらしい中国人学生にワンコインを手渡して店をでる。

五月にしては暑い。すれちがうビジネスマンはスーツを脇に挟み、ワイシャツの袖をまくっている。食後は喫茶店でアイスコーヒーと漫画が定番なのだが、そのときは公園へ足をむけた。ベンチはあらかじめ埋まっていたので、しかたなく花壇の煉瓦に腰をおろした。木陰で弁当を食べるOL、ネクタイをゆるめハンカチを額にあててベンチにねころぶ営業マン、ベビーカーをのぞきこむ母親、鳩にえさをあたえる老人。緑のフェンスのむこうではテニスのラリーがつづいていた

。

小学校五年のころだったとおもう。寝坊して母親の金切り声で飛び起きた。いつもより二〇分以上もよけいに眠っていたらしい。顔だけ洗ってから、トーストを口につめこみ、コーヒーで流しこむ。母親の小言が頭上から容赦なく降ってくる。

「だから昨日あんだけ言うたがに…」

昨夜は遅くまで映画を見ていた。ナイトー延長のせいで終了が十一時をまわってしまったのだ。『黒い絨毯』。主演はチャルトン・ヘストン。南米を舞台に、マラブンタと呼ばれる兵隊アリの大群が街を襲うというストーリー。四キロ四方に広がる兵隊アリが、山肌を真っ黒に覆っておしよせてくる。兵隊アリが通りすぎた跡は草木が食べつくされ、禿げ山と化す。ジャングルの生き物たちは、その気配を感じるといっせいに姿を消す。ジャングルのなかで銃をぶっぱなしても物音ひとつしないシーンが生々しかった。母親の、早く寝られよという言葉聞き流しながら最後まで見た。そうでなくても最近視力が落ちてきて、テレビのせい一勉強しないのだからそれ以外に考えられない一にされていたから、最後は喧嘩になったのである。昨夜からの続きのようなしつこい言葉に、おまえが起こさなかったのが悪いのだと、大声で返すと、大喧嘩になった。「何回ゆうても起きんとひとのせいにするか」と怒鳴り、僕が食べていたトーストを口からひきちぎり、コーヒーをシンクにぶちまけた。

僕は無言でランドセルを背負い玄関を飛び出す。母親の声がした。振り向くと、給食費の袋をかざしている。僕が出し忘れていて、今日で五日以上遅れているのだ。が、むしゃくしゃしていたので無視して走り出すと、追いかけてきてランドセルにねじこまれた。そこでまたひと悶着あって、泣きたい気分ですりだした。

公園の時計に目をやった。すこし走れば充分間に合うはずだ。ここまで無遅刻・無欠席。小学校六年間で、誇れるものといえばそれくらいだったから足をはやめた。公園を横切り、路地裏を駆けた。それでも、登校する生徒の姿が見当たらないと焦ってくる。公園の時計が狂っていたのかもしれない。ふいに母親の態度がよみがえってきて腹が立ってきた。国道まででると、信号は赤。信号無視しようにも、車はなかなか途切れず、時計をさがしてあたりをみまわす。青と同時に走りだして通学路沿いの米屋の時計をみたとき、絶望的になった。やっぱり公園の時計はおくれているに違いない。遅刻なら走っても無駄だとおもって、スピードをゆるめようかとおもうが、焦りが僕を駆りたてる。横っ腹が疼き、息があがって苦しい。そんなとき、前方の民家の屋根のうえに奇妙な物体をみつけたのだ。

最初、それは置物かとおもわれたが、目を凝らすとかすかに動いた。僕は足をとめた。心臓が激しく収縮し、荒い息が喉元から溢れでる。腰に手をあて黒光りのする屋根瓦をみつめた。薄茶色の毛に赤ら顔。目をしばたたき、背中を丸めている。猿だった。

猿？

僕は首をまわして周りをうかがうが誰もいない。屋根に視線をもどすと、猿はじっとこちらを見ていた。それから視線を宙にむけた。どうしてこんなところに猿がいるのかという真っ当な疑問ではなく、新種の生き物を発見したかのような興奮がこみあげてくる。

五月の初旬。空は青く高い。

屋根と同じ高さでパームツリーが微風にそよいでいる。僕は猿と対峙した。猿が僕に気付いて顔をこちらにむける。ときおり首をくくっとひねる以外、不動の姿勢で僕をみすえている。風が汗ばんだ首筋をなでる。

どのくらいの時間そうしていたのだろう。僕は自転車でやってきたおばさんのベルの音でわれにかえった。おばさんの射るような眼差しを避けて、背をむけて数歩あるきだした。再び振りかえる。やっぱり猿は屋根の上にあった。丸いシルエットが青空を切りとっている。僕がほっとしたのも束の間、背後の二階でアルミサッシの開く音がした。同時に素っ頓狂な声が響いた。窓から顔だしたおばさんが猿のいる屋根をみていた。僕は足早にその場を離れた。肩越しにふりむくと猿は四本足で動きだしていた。

ねじれた時間から抜けだした僕は、こどもの姿のない町をゆっくりとあるいた。そこは新鮮な気配に満ちていた。いつのまにか焦燥は消えていた。決定的で完全無欠な遅刻に奇妙な達成感がともなっている。ハミングがもれ足元が軽い。底のぬけたような青空に陽光があふれている。僕は人生の秘密をかいまみた賢者のように、すれちがう大人たちの視線をうけながした。通学路をはずれ商店街にむかった。造花でデコレーションされたアーチをくぐる。両側に連なる店舗は開店準備に忙しい。シャッターを開け、店先を掃き、陳列台のカバーをはずし、チェーンを巻いて軒先にビニール屋根を張りだしている。隣同士で挨拶をかわず声が、僕が通るたびに途切れた。僕はランドセルを鳴らしながら悠々と歩き、背中にはりつく視線を楽しんだ。八百屋のおじさん、肉屋のおばさん、米屋の店員、靴屋のばあさん。みんなが平日の朝に商店街をまかりとおる小学生を見つけて所作をとめた。僕は胸をそらして突き進む。そして猿を想った。五月の薫風になぶられる毅然とした姿。いまごろどうしているのだろう。

僕は商店街をぬけて橋を渡り、小高い丘へむかう。その昔は山城があったらしいが、今は面影もなく市民公園となっている。ゆるいカーブをなぞって市民公園にたどりついた。日差しはますます強く額から顎にかけて汗が流れる。中央に孔雀やインコが放たれているゲージがあり、そのまわりに遊具がちらばっている。テニスコートにもゲートボール場にも人気はなく、売店の前にベビーカーをおす母子の姿があるくらいだった。藤棚のしたのベンチから町をみおろす。五月晴れの下、自分の暮らしている町がこじんまりとうずくまっている。視線の先で海が光った。

僕はランドセルをおろしベンチに腰かける。ずいぶん遠くまできたような気がした。そのとき背後から声がしてびくっとした。お尻が数センチ浮いた。

小串昭雄が立っていた。口元に笑みを浮かべている。

「なんや、オヌシか。びっくりした」

「なにしとるがや、こんなとこで」

たあいのない会話がはじまる。

小串昭雄は転校生だ。去年僕のクラスに入ってきた。今年はクラスが違って疎遠になっている。おぐしという変わった苗字のせいでよくからかわれていた。だれもおぐしとは言わず「オヌシ」「オヌシ」と呼んでいる。当初は、言葉のはしばしに訛りがあって一たしか出身は山形だったはずだ一無口でおとなしい印象があったのだが、ある事件がきっかけで一目置かれるように一というよりもみんなが腫れ物に触るような按配になったのだった。

算数の授業が終わった休み時間のことだった。ガキ大将だった高木がいつものようにオヌシをからかっていた。机の上に手をおいてオヌシのノートにいちゃもんをつけたとき、小串昭雄が目前にあったコンパスをにぎり高木の手の甲に突き刺したのである。高木は絶叫した。右手で左手首をにぎりしめながら床の上を転げ回った。コンパスが手の甲にくっついている。小串昭雄は、そのようすを無表情でみおろしていた。高木の泣き声が耳をついて離れない。床には血の跡が散っていた。担任の先生が血相をかえって走ってきて二人を連れだした。高木は病院へ直行、小串昭雄はこっそりとしぼられたという。午後は、学級会の議題にあがり、手をだした小串昭雄はもちろんいけないが、ふだんの高木のふるまいも問題があったという意見があいつぎ、喧嘩両成敗が結論となった。翌日、高木は手に包帯を巻いて登校してきた。幸い、骨や動脈に損傷はなかったらしい。担任の前に二人がならばされ握手させられた。高木の変わり身もはやかった。小串昭雄を仲間に入れて遊ぶようになった。なんといっても腕力がものをいうのが少年世界だ。高木を「泣かした」オヌシは自然と影響力を高めたという次第だ。ただし、常軌を逸した行動への畏怖がどこかに残っていた。どこかよそよそしい感覚が、僕にも、みんなにも、オヌシ本人にもあったとおもう。

小串が僕たちと違うのは、いっしょに遊んでいても必ず最後まで帰ろうとしなかったことだ。帰りが遅くなると、みんな両親の小言をおもいうかべて帰りだすのだが、小串だけはいつまでも帰ろうとしなかった。日が暮れて、三々五々と散っていく仲間をよそに、小串はいつもひとり残った。夕闇につつまれ、東の空に細い月のかかったグラウンドで、小串は一人バックネットにむかってボールを投げていた。いつまでも。

遅刻もたびたびだった。ときにそれは数時間にもおよんだ。担任の先生も手におえないという感じで、なかば匙をなげていた。おそらく家庭の事情があったにちがいない。しかし僕らの世界にそんなものが入り込む余地はない。皆が皆、等身大で扱われ、理解される。小串の場合、それは「なにをしでかすかわからないやつ」というそれだった。微妙なポジションではあったにせよ、確実に居場所はあったのである。

「もしかして、俺さがしにきたがか？」

僕の問いに小串が答える。

「ちごうわい。たまにここ来るがや」

「遅刻のときか」

「そうや。おまえがさぼるがちゃ、めずらしいな」

僕はうなずきつつ、今朝からの行動を考えた。遅刻もはじめてなら、授業にでないことも、もちろんはじめてだ。小串の顔を見て現実にかえると、きらめいて世界が収束していく。忘れていた焦燥が頭をもたげはじめる。なにか重大なことをしでかしているのかもしれない。僕はつばをのみこんだ。

「雲ひとつないのう」

小串は両腕を伸ばして空をあおいだ。ランドセルを放りだし、足元のおおぶりの石をひろって町にむかって投げた。僕は慌てて立ちあがって鉄柵かけよった。眼下をのぞきこむ。車道と遊歩道が平行してゆるいカーブを描いている。幸い車も人影もみあたらなかった。

「人に当たったらどうするがい」

「どうせだれがやったかわからんやろ」

やっぱり怖いやつだ。僕は巻きこまれてはかなわないと思い、ランドセルをしょいなおした。

「どこいくがや」

「学校」

僕は足早に歩きだした。小串もランドセルをひろってついてくる。

「ゲームでもやりに行くか」

小串が大型ショッピングセンターの名前をあげた。僕は首を横にふって歩をはやめる。学校へいったときの言い訳が頭のなかに渦まいていた。小串はしばらくのあいだ、だらだらと僕のあとをついてきていたが、小走りになって僕の隣りにならんだ。

「おれももどるかな」

小串は語尾をのばして大声でいった。僕を追い抜き、ランドセルからつきでていたモノサシをふりまわして道端の草をなぎはらう。ジグザクに歩く小串の背中をみながら、僕は焦っていた。

僕と小串は坂道をくだって、商店街を通り抜けようとしたとき、紺色の前掛けをした米屋の親父が声をかけてきた。腕を組んで青黒い髭剃りあとをなでている。

「おまえらっちゃん学校行かんとなにしとるがい、こんな時間に」

平日の午前十時半にふらついている小学生を見咎めたのだ。僕はびくっとしたが、小串は平然として答えた。

「社会科の授業で市役所を見学に行くんです」

米屋の親父はきょとんとしていた。左右を見渡して引率の先生でもいるのか確認にしているようだった。小串はゆったりと歩いていたかと思うと、細い路地の角で、曲がるぞと僕の耳元でささやいた。小走りにうすぐらい路地を進んでいく。僕は小串の背中を追いかけながら何度も後ろをふり返った。

路地をぬけるとでると大通りにでた。二人で信号を待つ。僕は路地から米屋の親父が顔をだすのではないかと気にしていたが、小串はまったく動ずるようすもなく、「あついのお、夏みたいやな」といった。

僕は空をみあげた。まばゆい陽光に目を細める。おもわず、猿といった。

「なにっ」

「猿や。猿がおったがや」

「どこに」

「屋根の上」

信号が変わって歩きだす。

「どこの？」

「近所の家」

「うそつけ」

「ほんまや」

「うそやろ」

「ほんまやって」

小串がめずらしく人の話しに食いついてきた。僕はいきさつを語ってきかせる。

「ほんなら探しに行くか」

「もうおらんとおもう」

小串はあたりの屋根をみまわし猿をさがしていた。話しているうちに、自分もそれが夢のなかの出来事だったような気がしてきた。今もまた夢のつづきでなのではないか。二度目の信号待ちのとき、前にならんだおばさんの話し声が耳にはいった。

「そういえば、あんた、児童公園の猿、逃げたがやと」

「ほんまけ？」

「朝から警察でてひどい騒ぎながいぜ」

僕は小串と眼をあわせた。小串が白い歯をみせて笑った。小串のまともな笑顔を見たのははじめてのような気がした。信号が青に変わったとき、一人のおばさんが僕たちに気付いた。

「あんたら、学校どうしたが？」

小串はおばさんを追いこしながら、「うるせえ、ばばあ」といった。

おばさんは一しいたけのような顔していたが一固まっていた。目を見開き、九口をぽかんと開けている。小串が走りだし、僕は慌ててあとを追った。学校の手前までいっきに走りぬいた。校門の前で、小串が立ちどまり、腰に手をあて空をあおいだ。僕はつんのめりそうになりながら足をとめ、両膝に手をついた。二人の荒い息が重なる。小串昭雄の笑いがはじけた。僕もつづいた。あのおばさんの呆然とした表情がよみがえって笑いがとまらない。僕たちはアスファルトにすわりこみ、ころげまわって笑いつづけた。いったんおさまったあともくつくつと笑いがもれる。そのまま三限目の終了を待った。小串はまだ小刻みに身体を揺らしながら、人差し指で目元をぬぐっていた。

やがて、まのびのしたチャイムが鳴り響き、校舎からざわめきがはじけた。僕はおおしく深呼吸をして笑いをおさめて、小串と視線をかわしてから、かん高い歓声のうずまく校舎に足を踏み入れた。慣れている小串は堂々としたものだった。ピロティではみんながふりかえった。それぞれのクラスにむかうため階段をのぼったところで別れる。小串は口元に笑みをうかべた。あごをしゃくるような仕草のあと、くるりと身体のむきをかえた。僕は無言で小串の背中を見送った。外国映画のワンシーンのような気がした。

僕が教室へはいると大騒ぎになった。担任の先生がすっとなでてきて校長室に連れていかれた。警察に捜査を要請する一歩手前だったらしい。母親がひどく取り乱していたことも教えられた。担任を含め、校長、教頭、生活指導等の先生がずらりとならび、僕を問い詰める。おなじ席に小串の姿はなかった。いつものことだと思われたのだろう。

僕の行動に明快な理由があったわけではないから、返答に窮する場面もしばしばだった。市民公園に行っていたことは喋ったが、小串昭雄がいっしょだったことは口にしなかった。ふつうならパニックにおちいって泣きだしていたに違いない。しかし、僕は不思議と落ち着いていた。すべての言葉が五月の風のように右から左へ吹き抜けていく。あれから猿はどこへ行ったのだろう。校長室の窓からスズカケの木がみえた。濃い緑の葉が陽光の照り返しをうけて眩しかった。

そんなわけで、僕はいっきにヒーローに一もちろん悪がきどもの仲間うちでということだが一まつりあげられた。だが、午後になると話しの風向きが変わった。僕が小串昭雄といっしょだったことが判明したからである。ふたたび呼びだされ、問いただされた。僕は事実を認めた。担任は僕が小串にむりやり連れまわされたのだろうといった。もしそうなら僕の曖昧な返答も理解できると考えたらしかった。僕は否定したが、担任は信じようとしなかった。したり顔でうなずきながら煙草に火をつけた。僕が脅かされていると決めつけ、納得しているようだ。僕は小串がなんと言っているのか訊いてみたが、言を左右にしてごまかされた。小串の言い分は信用できないということなのだろう。僕はあきらめて口をつぐんだ。

その日、家に帰ると、母親は予想に反して優しかった。こっぴどく怒られるものと思っていたから拍子抜けした。猫なで声が気持ち悪い。学校からどんな報告がされたのかはわからない。僕はかえって居心地が悪く、さっさと夕食をすませて自室にこもった。

翌朝のテレビに、脱走した猿のニュースが流れていた。この小さな町の事件が全国区で報道されておどろいた。逃げだした六匹のうち、五匹まではすぐに捕まったが、一匹だけまだ捕まっていないらしい。母親に見送られて家をでる。昨日の優しさが持続していて変な気分だ。登校の途中、猿を警戒して何人もの父兄が通学路に立っていた。長い棒を手にした警官の姿をもみえる。僕はランドセルの流れに身をゆだねながら、きらめく屋根瓦に目を細めた。空には昨日と同じ青空がひろがっている。

小串昭雄とは、クラスがちがうこともあって、その後も話す機会がなかった。ときおり廊下ですれちがうときに視線をあわせるくらいだった。小串は話しかけてはこなかった。もしかして、僕が自分の罪を小串にきせたと誤解していた可能性もあった。事の次第を説明しようかどうし

ようか迷っているうちに、その機会は永遠に失われてしまった。というのも、その事件からほどなくして小串昭雄がふたたび転校してしまったからだ。しばらく姿をみかけないとおもっていたら、もう来ないとのことだった。転校ではなく鑑別所にいったのではないかと風の噂は語る。いまごろどこでなにをしているのやら。

あの朝。ほんのひとつき。たしかに僕は人生の扉をすこし開いた。

こぼれた光は、そのままで、いまだにひろがる気配はないのだが。

いつのまにか公園の人々もまばらになっていた。午後からは長く退屈な会議が待っている。僕は予算未達の言い訳をあれこれと考えながら、重い腰をあげた。